

特集

# 「東北六魂祭2012」 開催に向けて。



東北六魂祭

今月末、盛岡市を会場にして「東北六魂祭2012」が開催されます。これは、東日本大震災からの復興に向けて東北全体が一つになるうと、昨年夏に始まった祭り。第1回の開催地仙台から盛岡へと会場を移し、再び東北六県の熱い演舞が繰り広げられます。

昨年夏、仙台の街を舞台に、東北六県を代表する夏祭りが華やかな競演をした「東北六魂祭」。東日本大震災で失われた多くの魂を弔い、東北の元気な姿を全国に発信し、復興への一歩を踏み出すために開催されたものです。震災からまもない昨年春、東北六県の県庁所在地の市が中心となって実行委員会を設立。祭りムード自粛の空気がある中、祭りの力を信じて準備を進め、7月16日の開催にこぎつけました。

青森ねぶた祭、秋田竿燈まつり、盛岡さんさ踊り、山形花笠まつり、仙台七夕まつり、福島わらじまつりが一堂に会した東北最大規模の祭りは、2日間で約36万人の来場者を記録。第1回開催にあたって、交通整理や開催時期の課題は残りましたが、来場者および参加団体からは今後への期待も大きく、今年は5月26日(土)・27日(日)に、この盛岡市で開かれることが決まりました。

いわてDC開催期間中ということもあり、来場者は2日間で計20万人が見込まれているとのこと。東北六市の祭りパレードの他、各被災地の

伝統芸能披露、ステージイベント、東北各地の物産展、各祭り本開催に向けたPRブースの設置など、東北を盛りあげ観光面から経済復興を進める企画がたくさん予定されています。この「東北六魂祭」に向けた、街の動きや参加者の思いを伺ってみました。



昨年仙台で行われた「東北六魂祭2011」青森ねぶた祭の様子。

## 盛岡に降りた人たちを迎え、次へと案内したい。

### ●扇屋旅館／女将・熊谷智子さん

盛岡駅前にて旅館を営み70年を超える老舗「扇屋旅館」。5月のGW明けは少し予約状況が違っているようです。「東北六魂祭」の日程が決まるとすぐ、遠方からの電話で同祭開催期間の宿泊予約が埋まってしまったとのこと。

「私たちは、いつもと変わらず笑顔でお客様を迎え、地元の食材を使ったお食事でおもてなししたいと思っています。また、市内や県内の観光資料や情報を集めるよう心掛けています。例えば駅周辺のバス乗降場など、盛岡や岩手に初めて来る方はわからないことも多いでしょうから。簡単なことなら答えられるようにしなくては」と女将の熊谷さん。



近隣の観光ルートや平泉の情報も「拠点」として揃えています。

「『東北六魂祭』に来る方は、できれば被災地に足を延ばしたいと考えている方も多いかもしれない。私たちも沿岸に何度か足を運んでおり、三陸鉄道が開通した後は列車にも乗車してきました。自分たちが直接見たことや知っていることを、お客様に伝えていくことも大事だと思っています」。

「東北六魂祭」が復興への弾みになることを願い、盛岡に降りた人をその先へと案内できるよう少しずつ準備をしているそうです。



## 盛岡と岩手の元気を、「地酒」を通じて届けたい。

### ●酒 坂本／代表社員・坂本知規さん

開運橋のたもとに店を構える「酒 坂本」。同店の代表・坂本知規さんも4月以降、徐々に観光客の増加を感じており、「東北六魂祭」に訪れる来盛者に対し「酒屋」という専門の立場から岩手の素晴らしさを発信したい、そう考えています。

「毎年行われる『盛岡さんさ踊り』とは違ったカタチで行われる祭りは、私たちもワクワクします。何ができるのか模索中ですが、各酒メーカーからいろんな提案も寄せられています。玄关口である駅前の役割を活かし、岩手全体をPRしていきたいものです」。

坂本さんは十年前前から、取引先の居酒屋各店に岩手の地酒にあった季節のメニュー提案やポップづくりなどを続けてきました。それは、常連客はもちろん県外客に対して、岩手のおいしい酒や食べ物をも

どん紹介したいという自然な思いから始まったもの。まずはそうした日頃の活動をベースに盛岡という街の温かさを伝えたい、と坂本さんは話します。

「まだ生活が大変な人も多いですが、県外の方々に岩手で頑張る姿を見せることも大事。『東北六魂祭』といういい機会を与えてもらったと考えています」。



少しずつ入荷する沿岸酒蔵の限定酒。大切に味わってほしい。

## 盛岡らしく、大らかな『東北六魂祭』を！

### ●滝沢村さんさ踊り保存会／千葉公美(まさみ)さん

中学の頃、「滝沢村さんさ踊り保存会」に参加して太鼓の魅力にはまり、「ミス太鼓」として活躍、有志と共に「いわてさんさの会☆加藤家」の活動を行うなど、「盛岡さんさ踊り」が大好きな千葉公美さん。震災後しばらく祭りの自粛ムードがあったため、昨年「東北六魂祭」開催を聞いた時、純粋に「見に行きたい」と思ったそうです。そして、参加が決まった時、「さんさ踊りをやってもいいんだ」と素直な喜びの思いが湧きあがったのだとか。



他県の祭参加者との交流も貴重な時間でした。

昨年の「東北六魂祭」では、観客の熱気を間近で体験し、魅せる側として気が引き締まる思いがしたという千葉さん。

「踊る人だけではなく、祭りを運営するスタッフの力がどれだけ重要か、改めて深く認識した『東北六魂祭』でした」。

一方で、東北六県の夏祭りが同じ場所に集まる贅沢感も感じたそう。

「同じ日程のなかで東北全ての祭りを見られるのはとてもお得感があります。地元の皆さんも見ておいて損はないはず。生の祭りは、体に響き心が躍ります！」と話す千葉さんから自然に笑顔がこぼれました。



■「東北六魂祭」は復興への一歩を担う大切な機会、皆で一緒に盛り上げていきましょう。

※当日はかなりの混雑が予想されます。会場への入場制限をする場合もございますのでご了承ください。